易にさせるためでした。

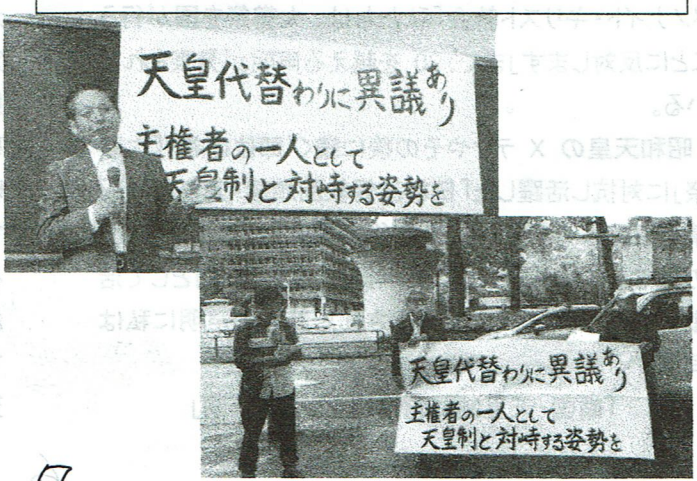
1868 年に誕生した明治政府は、近代日本が国際社会に歩み出すにあたって「国家」としての力と形態を整えるために「天皇（制）による統治」を推し進めます。それは、実質的統治を執り行う政府の権力の正当性の根拠として「天皇の権威」が必要だったからであり、また戦争を含む大きな犠牲を国民に強いるための方便として「天皇によって生かされている」という家族主義的共同体幻想（天皇制）が必要だったからです。そして、この近代天皇制の成立とそこにある意図を考えるならば、天皇に与えられている役割は、現行憲法下における象徴天皇制においても維持されている事は明白です。しかも、1945 年 8 月以前の弾圧国家の根幹にあった天皇の統治権をはく奪したように見える象徴天皇制は、国体護持との引き換えにおいて受け入れざるを得なかった憲法 9 条の存在と相まって極めて「平和主義的」な装いをまとう事が可能となっています。しかも、「戦争」の記憶と地続きであった「昭和」という時代と違い、現状においてはより平和主義的、家族主義的な幻想を振りまくことが可能ともなっています。8.8 メッセージが公表された際にその発言の「政治性」を憲法違反と問う声も上がりましたが、それらの声をかき消すほどの「高齢の天皇への同情論」は、今なおこの国はその幻想の中に生きている証であろうと思います。そして、権力が自らの支配と統治を容易かつ強化するために天皇制原理を受容させ続けようとしてきた一つの帰着点として、現安倍政権の国家主義的・権力主義的な政権運営を見る事が出来ます。

私たちはその様な情勢下にあって、権力による支配・統治の装置としての天皇制の本質を再確認すると共に、その天皇制の支配構造を現行憲法が支えている事を再認識しなければなりません。そして、少なくともその現行憲法において「（天皇の地位は）主権の存する日本国民の総意に基づく」と定められているというのであれば、その「意思」を明確にする時にきているのではないかとも思います。この度の「天皇の代替わり」への反対はもちろんですが、これを改めての契機として近代以降の日本が保持してきた権力支配強化装置としての天皇制支配構造の廃棄を求め、改めて反権力・反天皇制の闘いのうねりを全国へと広げていかねばならないと考えます。2018 年 6 月 13 日

今回の「即位の礼」や「大嘗祭」に対して私が把握したのは以下の声明である。日本基督教団兵庫教区「大嘗祭に反対する声明」（2017 年 5 月）。日本バプテスト連盟理事会「新天皇即位と元号改元に際しての私たちの信仰的表明」（2019 年 4 月 24 日）。日本基督教団「天皇の退位および即位の諸行事に関する声明」（2018 年 7 月 9 日付）。日本カトリック司教協議会は「関連する一連の行事において、政教分離原則（憲法第20条など）を厳守し、国事行為と皇室祭祀（さいし）の区分を明確にすることを要望する」（2018 年 2 月 22 日）

スマホに見入る人々が巷に溢れている。隣の人に関心を持たない風情に恐ろしくなる。こうして国民主権は骨抜きにされていくのだろうか。

天皇代替わりを機に天皇制を考える
あいちネットワークの行動報告

４月１日、仰々しく発表された新元号「令和」。安倍首相の意向が強く反映されたとされる新元号に対し、ほとんどのマスコミは無批判に「新たらしい時代」をうたい、多くの市民もまた天皇による時間の支配に対して無自覚に受け入れています。そして、４月 30 日のアキヒト天皇の退位と翌日のナルヒト天皇の即位について、マスコミは新元号発表時を上回る「天皇代替わり」特集を行った。代替わりネットは、この事態に、４月 29 日、「天皇代替わりに異議あり！主権者として、天皇制と対峙する姿勢を」をテーマに、弁護士の澤藤統一郎さんを講師に講演会を行った。澤藤さんは「奴隷主を敬愛するに至った奴隷こそが、真の奴隷である。天皇制に囚われ、天皇に恐れ入った精神が、主権者としてあるまじき臣民根性にほかならない。今なお国民に根強く存在する臣民根性の残滓を払拭し、天皇制マインドコントロールをはねのけるために、『誰にも恐れ入らない反権威の精神』を身につけよう。」と話された。約 90 名が参加し、質問や意見も多数あった。

５月１日には、メーデー会場と栄ラシック前での街宣行った。差別構造の元凶である天皇制に対し、これからも続く一連の行事に対し細やかでも異議ありの声をあげていきたい。